

# 十世大泉道鑑が取り上げられた『仙台領に生きる郷土の偉人傳Ⅲ』の内容の紹介



仙台藩茶道石州流清水派宗家十一世  
仙台藩志会常任理事  
「政宗公ワールド」プロジェクト理事  
東北大学名誉教授

大 泉 道 鑑(康)

郷土史研究家古田義弘先生は、今までに数多くの名著とされる本を執筆してきたが、二〇二〇年四月には『仙台領に生きる郷土の偉人傳』を出版して、仙台地区では大好評を博し、話題作となった。続いて二〇二一年四月には、その続編となる『仙台領に生きる郷土の偉人傳Ⅱ』を出版し、「仙台市の書店で最も売れる本」（金港堂書店調べ）として多くの市民から再度注目を浴びた（図1及び表1）。

今回、その本のシリーズとして三番目となる『仙台領に生きる郷土の偉人傳Ⅲ』（以下本書と略記。図2）が二〇二二年二月に発刊されたが、ここには主として「学問」や「文化・芸術」の分野の進歩・発展に多大な貢献をした人物が



図1-2 古田義弘先生の著書  
『仙台領に生きる郷土の偉人傳Ⅱ』



図1-1 古田義弘先生の著書  
『仙台領に生きる郷土の偉人傳Ⅰ』

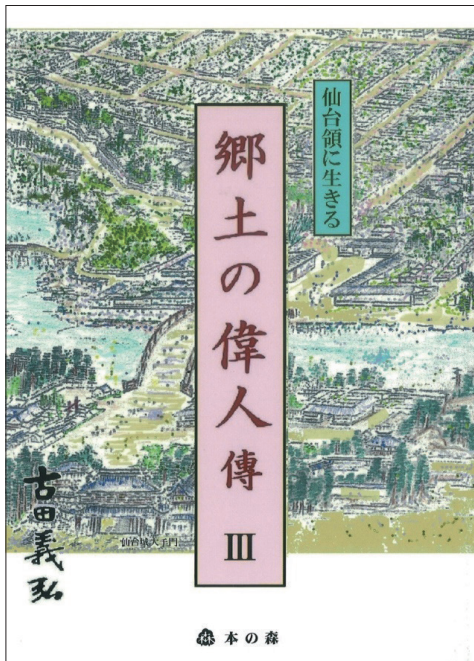


図2 古田義弘先生の著書  
『仙台領に生きる郷土の偉人傳Ⅲ』（本書）

◆古田義弘の本◆

「明治・大正・昭和の人  
仙台領に生きる郷土の偉人傳Ⅰ」

(2020年4月 初版発行)

- |                      |               |
|----------------------|---------------|
| 1. 一代で財を築き、地域に貢献     | 八木久兵衛 (仙台市)   |
| 2. 一橋大学創立。東京府知事      | 富田鉄之助 (東松島市)  |
| 3. 明治の豪商・生糸の輸出で外資獲得  | 熊谷伊助 (一関市)    |
| 4. 近代日本の羅針盤となった男     | 後藤新平 (奥州市)    |
| 5. 千町歩地主・慈善事業や寄付行為   | 斎藤善右衛門 (石巻市)  |
| 6. 海軍大臣・内閣総理大臣       | 斎藤実 (奥州市)     |
| 7. 大蔵大臣・内閣総理大臣・子爵    | 高橋是清 (東京・仙台市) |
| 8. 教育家・国語辞典『言海』編纂    | 大槻文彦 (一関市)    |
| 9. 仙台時代、二高と栗野観音      | 栗野健次郎 (一関市)   |
| 10. 闘わない将軍、日独伊三国同盟排除 | 米内光政 (盛岡市)    |

「仙台領に生きる郷土の偉人傳Ⅱ」

(2021年4月 初版発行)

- |                       |               |
|-----------------------|---------------|
| 1. 裏千家第十四代宗室と結婚       | 千嘉代子 (仙台市)    |
| 2. 最後の海軍大将            | 井上成美 (仙台市)    |
| 3. 秋田戦争に出陣。特命全権大使     | 高平小五郎 (一関市)   |
| 4. アンビジャス・ガール 新宿中村屋開く | 相馬黒光 (仙台市)    |
| 5. 「荒城の月」作詞。文化勲章      | 土井晩翠 (仙台市)    |
| 6. 大正デモクラシー、自由民権運動    | 吉野作造 (大崎市)    |
| 7. 国外情勢学び、海防主張        | 林子平 (仙台市)     |
| 8. 開国を遂言、今日の基盤を築く     | 大槻磐溪 (東京・一関市) |
| 9. 慶長遣欧使節船、石巻出港       | 支倉常長 (仙台市)    |
| 10. 江戸期に日本人で初めて世界一周   | 石巻「若宮丸漂流民」    |
| 11. 米国各地で見聞し『航海日誌』執筆  | 玉蟲左太夫 (仙台市)   |
| 12. 石巻からアラスカ北極の地へ     | フランク安田 (石巻市)  |
| 13. カナダに渡り、登米地方の人々救う  | 及川甚三郎 (登米市)   |
| 14. ハワイ日系移民を率いて活躍     | 牧野富三郎 (石巻市)   |
| 15. パラオ、南洋移民の道        | 横尾東作 (加美町)    |

表1 古田義弘先生の著書  
『仙台領に生きる郷土の偉人傳ⅠとⅡ』（偉人）

【仙台】 週間ベストセラーズ  
(金港堂書店調べ)

- ① 仙台領に生きる郷土の偉人傳Ⅲ  
(古田義弘) 本の森 880円
- ② 3.11キヲクのキロク、そしてイマ。  
2021 (3.11オモイデアーカイブ) 2,200円
- ③ 看取るほどわかる命の重さかな  
(山室誠) 金港堂出版部 1,320円
- ④ ヒトの壁  
(養老孟司) 新潮社 858円
- ⑤ 母の待つ里  
(浅田次郎) 新潮社 1,760円

注) ⑥～⑩は割愛

表2 本書が仙台市の書店で一番売れている本の  
週間ランキングのトップ  
(令和4年2月27日付河北新報の記事を改変)

選ばれている。本書には、筆者の母で当流の宗家十世故大  
泉道鑑（本名淑子）（明治四十二年～平成二十二年―一九〇九  
～二〇一〇）が、「当流の中興の祖」として取り上げられた。  
本書も前回一、二回と同様に「仙台市の書店で最も売れる本」  
に三年連続で選ばれた（表2）。このシリーズの本は、仙  
台領の近代・現代の政治史・経済史だけでなく、文化史に  
も大きな足跡を残すと評価されるに至った。  
ここで、本書の概略と出版の趣旨の理解の便のため、「目  
次」「あとがき」「参考文献」の箇所を次に示した。

## 目次

### 第一章 遂げずばやまじ

|                                                    |    |                                                              |    |
|----------------------------------------------------|----|--------------------------------------------------------------|----|
| 1 伊澤平左衛門                                           | 7  | 加 / 江戸廻米 始まる                                                 |    |
| 二代目平蔵「勝山」の基礎 / 仙台商業会議所会頭 貴族院議員に / 七十七銀行設立、仙台の発展に寄与 |    | 5 大槻平泉                                                       | 33 |
| 2 建部清庵                                             | 13 | 一関の平泉 養賢堂字頭に / 養賢堂施設の拡充 / 総合学園化と医学館の創設                       |    |
| 『時の太鼓と建部清庵』 / 『民間健児録』『健児草木図』                       |    | 6 志賀潔                                                        | 39 |
| 出版 / 知と情の名医                                        |    | 赤痢菌の発見者 人を救う / 北里柴三郎博士門下に / 慶応大学教授、京城市大総長に / 文化勲章受章、仙台市名誉市民  |    |
| 3 芦東山                                              | 19 | 7 佐藤基                                                        | 45 |
| 生い立ち 農民から武士へ / 仙台藩儒学者へ『無刑録』                        |    | 医師を目指し東北帝大へ / 世界で初めてインスリンを発見 / ノーベル生理学・医学賞にあと一步 / 仙台赤十字病院を開設 |    |
| 編纂 / 学問所講義席の建議と処罰 / 幽閉中に『無刑録』を完成 / 幽閉後に故郷へ戻る       |    | 8 千葉卓二郎                                                      | 51 |
| 4 川村 孫兵衛                                           | 27 | 放浪の求道者 / 「五日市憲法」起草に尽力 / 敗者が生んだ民衆憲法                           |    |
| 北上川改修で田園・豊穡の地に / 新田開発で実質石高増                        |    |                                                              |    |

## 第二章 美・遊・創・感

- 9 大泉淑子 ..... 59  
 仙台藩系道石州流清水派 / 中興の祖 十世道鑑 /  
 母の背中を見て育った子供たち / 十世道鑑の半生 流  
 派の聖典 出版 / 瑞鳳殿で政宗公の法要 献茶式
- 10 佐藤 忠良 ..... 67  
 学生時代に才能を開花 / 「恥かけ、汗かけ、手紙かけ」が  
 口ぐせ / 「佐藤忠良記念館」開設 / 技を磨き続けた  
 職人彫刻家
- 11 原 阿佐緒 ..... 73  
 恋多き女性 情熱の歌人 / 歌人として大きく成長  
 東北帝大教授・石原純との恋愛 / 不運で不慣れた生活
- 12 井上 ひさし ..... 81  
 幼少期 父の蔵書を乱読 / 『青葉繁れる』が小説家への  
 道に / 放送作家・劇作家として活躍の場を広げる
- 13 宮城 新昌 ..... 87  
 新しいカキ養殖を求めて北米へ / アメリカのカキ養殖  
 を救う / 垂下式養殖法の原型を生み出す / 世界の  
 養殖種ガキの八割は石巻産がルーツ
- 14 後藤 桃水 ..... 93  
 郷土の唄発掘 伝承に力 / 医学部を退学し、尺八に没頭  
 松島が見える岬で「斎太郎節」を唄う / 古里の大塚浜に  
 民謡碑建立
- 15 石ノ森 章太郎 ..... 99  
 中学時代、新聞に漫画を投稿し入選 / 手塚治虫のアシス  
 タントで上京 / 世界旅行が後の作品に好影響 /  
 石巻に「石ノ森萬画館」開設
- あとがき ..... 106



## あとがき

思った通りにはならないが、

やった通りにはなる！

書斎にある荒了寛（あら・りようかん）の日めくりカレンダーの格言である。

了寛は、仙台市にある仙岳院法嗣となり、その後ハワイ及びアメリカ本土で仏教の布教活動に従任、独自の画法による分かりやすい仏画も描き、著書も多い。もう一つ紹介しよう。

失敗して利口になる 挫折して強くなる

人生に無駄はない！

人生、何歳になっても夢を持つことは素晴らしいことである。たとえ、夢が夢で終わってしまったとしても、決して「夢をみたこと」自体が無駄ではないのである。人生がそれだけ豊かになる、と考えれば気持ち前向きになるというものである。

今、想像ば八十六歳になったが、少しは違った通りになったかな？と思う。高校（母校）の校庭には、郷里（岩手県一関市）の大先輩、大槻玄沢（おおつき・げんたく、江戸後期の蘭学者・蘭医）の格言が石

碑として残っている。そこには「遂げずばやまじ」とある。本書第一章の章タイトルとして記載させていたでいるが、この意味は「井戸を掘るならば、水が出るまで掘りなさい」という意味だという。失敗を恐れず、夢に向かって進みましょう、社会に貢献するという哲学こそが、何よりも大切であることを教えてくれていると思う。

私の菩提寺（仙台市若林区・林香院）の山門の脇には、「念すれば花開く」と刻まれた小さな碑が建っているが、これも大好きな言葉だ。出来れば、来年も「仙台領に生きる郷土の偉人傳」を書き続けたいと念じている。自分なりに今の自分に出来る社会貢献だと思う。

本書を出版するに当たって、前書と同じように「見やすく」「読みやすく」「分かりやすく」、つまり、

「三やすく」をモットーとしている。私の拙い「紙等之居」（本書）を発行するに当たって、仙台市博物館

河北新報社など個人を含めて多くの資料、写真等を参考にさせて頂いた。改めて厚く御礼申し上げる次第である。編集に当たっては、本の森の大内悦男氏に大変お世話になりました。感謝申し上げます。

令和四年二月

古田 義弘

## 参考文献

- 『宮城県史』宮城県 昭和四二年  
『仙台市史』近世1 仙台市史編纂委員会 昭和三年  
『仙台市史』近世2 同 同五年  
『仙台市史』近1 同 同〇年  
『宮城県の歴史散歩』宮城県高等学校社会科学部研究会歴史部会 平成一九年  
『石巻市史』石巻市 昭和四二年  
『一関市史』一関市 平成五年  
『登米町史』登米町 平成二年  
『仙台藩ものがたり』河北新報社編集部 平成〇年  
『宮城県の歴史』高橋昌雄 山川出版 昭和四四年  
『建部清庵の世界』大島英介 一関教育研究所  
『藩医建部清庵の医療活動』大島晃 建部清庵文化顕彰会 世嫡の一遷道 平成九年  
『建部清庵―「二関に過ぎるもの」といわれるのはなぜか』相馬美貴子 平成二八年  
『河北新報』記事参照 二〇一四年一月九日  
『仙台藩の学者たち』鶴飼幸子 仙台・江戸叢書⑦ 平成二年  
『ぜんだい歴史の窓』菅野正道 河北新報社 平成二四年  
みやぎの先人集『未来の架け橋』宮城県教育委員会編 昭和〇年  
『りらく』記事参照 木村紀夫 (株)プランニング・オフィス 令和三年  
『仙台藩の戊辰戦争』幕末維新人間録 荒蝦夷 木村紀夫 平成二〇年  
『仙台藩の学問と教育』大藤修 仙台・江戸学叢書⑭ 平成二年  
『仙台市史』近世3 仙台市史編纂委員会編 平成一六年  
改訂郷土史事典⑥『宮城県』佐々久編 豊社 昭和五七年  
『河北新報』記事参照 二〇一〇年一〇月一六日  
『りらく』記事参照 木村紀夫 (株)プランニング・オフィス 二〇二二年二月号  
『宮城県史料事典』河北新報社 昭和五七年
- 『仙臺藩史用語辞典』仙台郷土研究会 平成二〇年  
『仙臺藩の研究』近世村治研究会 日本学術振興会 昭和三年  
『さんき時雨考』浅野建一 和泉書院 昭和五八年  
利水・水運の都仙臺 佐藤昭興 仙台・江戸叢書② 平成一九年  
伊達の国の物語 菅野正道 (株)プレスアート 令和三年  
『東和町史』東和町 昭和六〇年  
『岩手年鑑』岩手日報社  
『ナイン』井上さし (株)講談社 平成二年  
伊達文化の伝承と記憶 古田義弘 本の森 平成三〇年  
『仙臺藩の戊辰戦争』東北福澤塾生戦記 木村紀夫 荒蝦夷 平成三〇年  
仙臺城下の町名由来と町割 古田義弘 平成二五年  
仙臺八街遺蹟の今昔 古田義弘 平成二六年  
『河北新報』記事参照 平成二六年一月九日  
『河北新報』記事参照 令和三年九月二五日  
『河北新報』記事参照 平成二二年二月三日

さて、十世道鑑の波瀾<sup>はらん</sup>に富んだ人生を本書に取り上げて戴いたのは、以下の理由によると考えられる。

十世道鑑は、芸術的に完成度が高い水準に達しているとされる「伊達文化」を代表する当流の古き歴史と輝かしい伝統、それに深遠なる茶道の真髄を正しく後世に伝えるため、当流の歴代の茶道頭・宗家の継承の印（三種の神器）のひとつである『清水動閑註解石州流三百箇條』（三巻）及びそれと関連性が深い『動閑茶湯書』（十八冊）の解説研究をライフワークに定め、その研究に没頭する日々を送ることになった。これらの研究成果を著書『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』（図3）にまとめ、自費出版したことに加え、その一部は学会誌へ論文として投稿するため、原稿用紙に書き溜<sup>た</sup>めて、その準備をしていた点も、茶道研究者として、高く評価された所以<sup>ゆえん</sup>であると考えられる（図4）。また、藩政時代から「伊達文化」の中心を担ってきた当流のこの上もなく上品で美しい手前が、その文化として極めて貴重であると確信するに至り、これを未来永劫後世に伝えるため、永い年月をかけて数冊の「教本」（図3）にまとめ、自費出版に漕ぎつけた点が、宗家・茶道研究者として大きな責任を果たしたと認められたと考えられる。

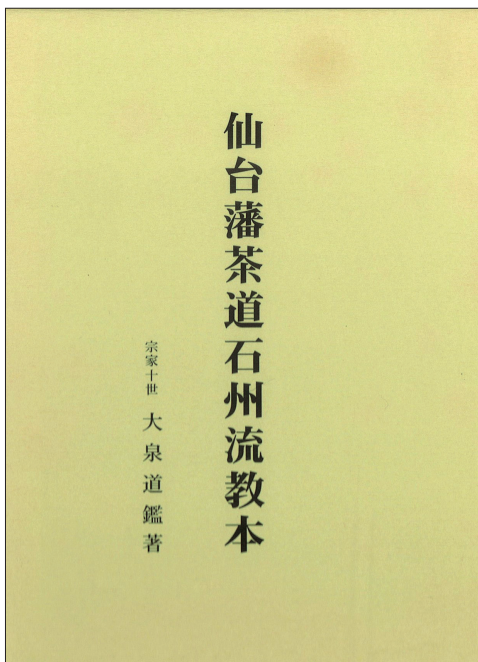


図3-2 最初に出版された教本  
『仙台藩茶道石州流教本』

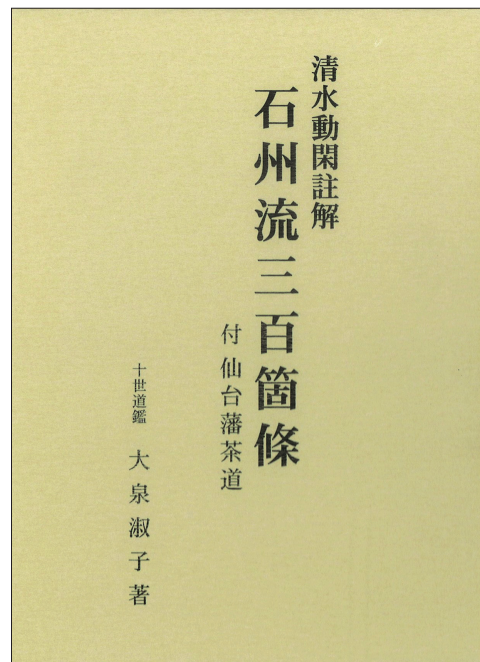


図3-1 十世道鑑の著書  
『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』



# 茶の湯文化学

図4 『茶の湯文化学』33号表紙

今まで述べたことは、我が郷土の誇りである「伊達文化」の伝承と発展のために、十世道鑑の「我慢」と「努力」の人生を懸けて行った茶道活動が、見事に結実したと言える。

そのため、本書の出版の件は当流にとつては、この上もなく名誉なことで、また慶賀に堪えないことと、その後継者である筆者は勿論のこと我が弟子一同と共に、その喜びをかみしめている次第である。そこで、筆者は本書の十世道鑑に紹介することが記載されている箇所を、主としてここに紹介させて戴ければ誠に幸いであると考え、筆を執った

次第である。

十世道鑑の「我慢」と「努力」の人生について、本書の五十九〜六十六頁に詳述されている。その前半の人生には、十世道鑑の誕生、子供時代、結婚と夫との死別、その後の子供の養育・教育について触れられている。一方、その後半の人生には、一転して茶道人生ひと筋に生き抜いていった様子が記述されている。具体的には、前にも述べた当流の茶道頭・宗家の継承の印の「三種の神器」のひとつである伝来の「茶湯書」や厩大な「古文書」の解説研究、また藩政時代から脈々と受け継がれてきたこの上もなく優美な当流の手前を、後世に正しく伝えるための「教本」の出版活動に心を砕いたことが記述されている。今は天に召された十世道鑑は、本書を見て自分の人生を振り返り、特に本書の「あとがき」に記されている「思った通りにはならないが、やった通りにはなる。」という仙岳院法嗣であった荒了寛あつろよかん（昭和三年〜令和元年——一九二八〜二〇一九）の格言通りであつたと、実感していると筆者は確信している次第である。

これらの内容の詳細については、本書の著者の古田先生の許可を得て、その全文を次に転載させて戴いた。

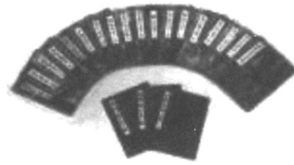
## 9 大泉 淑子（おおいずみ・よしこ）

仙台藩茶道石州流清水派

中興の祖 十世道鑑



大泉 淑子



『清水道鑑註解石州流三百箇條』（三巻）  
及び『道閑茶湯書』（全十八冊）

### ▼家（きやうけ）

一門・一族の中心になる家。特に学問・芸術などの正統を伝えてきた家。家元。そうか。

### ▼師（し）

師と仰ぐ人物につかえ、教えを受けること。

### ▼皆伝（かいでん）

師から技量の奥義をことごとく伝えられること。

大泉淑子（おおいずみ・よしこ）。石州流清水派十世道鑑<sup>どうかん</sup>は、一九〇九年（明治四二）十月、仙台市米ヶ袋（現青葉区米ヶ袋）で、父陸軍少佐落合房吉<sup>ふさきち</sup>と母ツイ（九世道鑑）の二女として生まれる。一九六一年（昭和三六）、石州流清水派家を継承し、十世道鑑と称された。

片平丁小学校を経て宮城県第一高等女学校を卒業。五歳から母九世道鑑に師事（入門）、一九二六年（大正一五）高等女学校卒業と共に皆伝を授与された。

高等女学校卒業後、さらなる進学を希望するも、両親の指示に従い嫁入り修業を始めた。そして、一九二九年（昭和四）陸軍少将大泉製之助<sup>せいのおすけ</sup>の長男製明<sup>のりあき</sup>（東

▼朝鮮總督府(ちようせんそうとくふ)

朝鮮の植民地時代(一九一〇〜四五)、支配の中枢として置かれた統治機關 一九一〇年(明治四十三)、韓国併合により、朝鮮は日本の植民地になった。立法・司法・行政の三種を掌握。

▼肺結核(はいけつかく)

結核菌によって起こる慢性の肺の感染症。肺病。

▼玄界灘(げんかいなだ)

福岡県の北西方の日本海。東は響灘(ひびきなだ)、西は対馬海峡・宍岐(いさき)水道に連なり、冬は風波の激しさで名高い。沖ノ島・大島・小呂島(おろのしま)、烏帽子島・姫島、玄海島などがある。

▼太平洋戦争(たいへいようせんそう)

一九四一〜四五年(昭和十六〜二十)にかけて、日本と中国、アメリカ、イギリス、オランダなど連合国との間で起こった戦争。第二次世界大戦の一環。

北帝国大学工学部卒業。朝鮮総督府勤務)と結婚、朝鮮に渡る。朝鮮で子供五

人(三女二男)をもうける。しかし、長男孝明を一歳時に病で失う。また二男

康(現十二世道鑑)も一歳の時、肺結核に罹り、大学病院ではもう助からない

と宣告されたという。しかし、母淑子の献身的な看護の結果、奇跡的に命を繋

ぐことが出来た。

淑子の夫製明は、京城府(現韓国ソウル特別市)の通信所所長(技師)だっ

たが、一九四四年(昭和十九)四十歳の若さで不治の病により、幼い子供四人

を残して他界。淑子は子供四人を連れ玄界灘を渡り、亡夫の実家(現仙台市若

林区清水小路一・現在茶道教室)を目指して無事引き揚げた。しかし、これか

らが「我慢」と「努力」の人生をスタートすることになる。

この時期は、太平洋戦争終結直前で軍都仙台は米軍の空襲を受け、大混乱に

陥っていた。間もなく終戦を迎えたが、とても茶道で四人の子供を育てられる

社会状況ではなかった。



濃い灰色部分が空襲で焼失した市街地  
（『仙台市史』特別編より）

▼軍都（ぐんと）

明治十九年に師団の所在地が定められ、仙台鎮台（ちんだい）は第二師団と称されることになった。

▼仙台空襲（せんだいくうしゅう）

一九四五年（昭和二十）七月十日朝、アメリカ軍の航空機によって焼夷弾（しょういだん）が投下され、仙台市中心部の約二割が焦土と化した。

▼東北電々公社（とうほくでんでんこうしゃ）

日本電信電話公社（当時）の略称。現在のNTTグループの前身。

▼非水溶液（ひすいようえき）

水以外の全ての溶液のことを指す。

そこで、淑子は一時洋裁で身を立てることを決心して、専門学校（宮城ドレ

スメメーカー女学院）に通って洋裁の技術を習得した。大急ぎで洋裁研究所（塾）を開き、その教師をして子供たちを育てた。

母の背中を見て育った子供たち

淑子（十世道鑑）は、一人の母として、茶人・茶道研究者として「我慢」と「努力」の生涯を貫き通したが、子供たちはその母の背中を見て育ってきた。

長女妙子（たえこ）は向学心が旺盛で、母と同じ宮城県第一高等女学校に進むが、卒業後は経済的理由から希望する進学を諦め、東北電々公社に勤務し家計を助けた。

後に斎藤謙一（けんいち）（東北帝国大学法文学部法科卒業。宮城県勤務）と結婚して二人の子供に恵まれたが、仕事が続けられるように淑子が養育を全面的に受け持った。

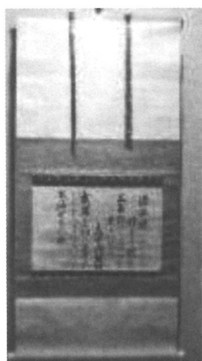
二女幸子（さちこ）は、気のやさしい娘で、母の仕事を手伝い、幼少の弟（康）の面倒をよく見ていた。東北大学理学部に進学後、農学部へ転部して、卒業後は同大学

▼嘱託医（しよくたくい）

正式の雇用や任命によらないで、業務に携わるよう依頼した医師。



石州流清水派宗家十一世  
大泉康（道鑑）



掛物「綱村公御歌」  
（仙台藩四代藩主伊達綱村公筆）



71歳の淑子

非水溶液化学研究所に勤務した。東京電力に勤務していた夫・安藤洪哉（東北大学工学部卒業）と結婚後に退職。子育ての手が離れてきた頃に、専業主婦から一転して、神奈川県葉山町の町議会議員となり、「緑を守る運動」の推進役として社会に貢献した。

三女雅子も母の生き方に強く影響を受けた。東北大学医学部薬学科（現薬学部）卒業後、二女と同じように大学の研究所に勤務し研究者を目指した。しかし、安積徹（東北大学教授）と結婚後、諸々の事情と子育てが一段落した頃、一大決心し、専業主婦から医師への転身することにした。並々ならぬ努力の甲斐があり、なんと五十五歳で秋田大学医学部に入学を果たした。その後、見事医師国家試験に合格。当時合格者の最年長日本記録を更新し、全国紙にも報道された。六十四歳になった雅子は、病院勤務の研修医時代、日曜日は仙台市内に住む実母の世話にもいそしむ。体の空く暇はない。現在（二〇二二年）、八十三歳を過ぎても病院の嘱託医として高齢者の担当をしているという。



### ▼果皮（かひ）

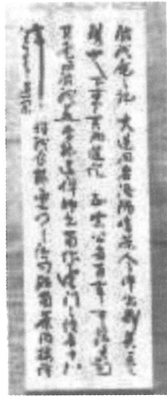
種子を除く果実の部分で、主として子房壁の成熟したもの。

### ▼認知症（にんちしやう）

成人後期に病的な慢性的な認知機能低下が起きる状態。以前は痴呆症（ちほうしやう）と言われた。物忘れ徘徊（はいかい）などの問題行動を起し、日常生活に著しい支障が生じることが多い。主な原因は脳梗塞（のうこうそく）など脳血管系の病気とアルツハイマー病。

### ▼茶道頭（さどうがしら）

仙台藩の茶の湯を直接担当する家臣団は、茶道衆である。茶道衆の筆頭にいた人物は一世清水道閑など。



『渋紙庵之記』二世勲鑑筆

三姉妹とも正に母の背中を見て育ったと言えよう。中高年者には勿論、青年たちにも多大な勇氣と希望を与える生き方ではないだろうか。

二男康（やすし 十一世道鑑）も母の背中を見て育った。幼少の頃は姉たちがよく

面倒をみていたという。東北大学医学部薬学科卒業後は、一人の薬学研究者として一生を生き抜くことを考えるようになった。

康は、東北大学教授（薬学博士）就任を機会に「自然界から認知症に有効な天然素材の発見」をライフワークに決め、静岡県立大学大学院薬学研究科の特任教授として取り組んだ「未利用みかん果皮の抗認知症成分活用技術と高付加価値品種の開発」（農林水産省所轄プロジェクト）などが、週刊新潮に記事掲載されたこともあった。

一方、康は石州流清水派の宗家の補佐・代理として、特に妻・紀子（教授道紀、後の十一世道鑑の宗家代理）と共に十世道鑑の茶道活動を支えた。また、十世道鑑の茶湯書の解説研究成果に基づいて、数報の論文を茶道の学会誌に発表し

▼神器（じんぎ）

神から授けられた宝器。特に天皇の地位と不可分の「三種の神器」として、「やたの鏡」「くさなぎの劔」「まがたま」を指すことが多い。

石州流では、茶道頭・宗家を継承した印（しるし・神器）として以下の文献が伝わる。『清水動閑註解石州流三百箇條』（三巻）、『動閑茶湯書』（全十八冊）他。

▼聖典（せいてん）

その宗教の教理、教条、戒律、儀軌（ぎぎ）などを記した書物。



『仙台藩茶道石州流教本』（右）と『大泉道鑑言の葉集』

た。康は、現在でも華学と茶道の正に二刀流へと成長を続けている。

## 十世道鑑の半生『流派の聖典』出版

淑子（十世道鑑）は、康が大学へ進学し、子供の養育が一段落した頃から道鑑としての半生は、一転して「茶道の道一筋」に歩んでいった。藩政時代から伊達文化の中枢を歩んできた石州流清水派の茶道頭・宗家を継承してきた者としての使命を果たすのだった。伊達文化として、芸術性とその完成度が高度に達していた石州流清水派の真髄（しんずい）を後世に、正しく伝えなければならないという重責を感じる毎日を送ることになった。

日々弟子たちに茶道を教授する傍ら、茶道頭・宗家を継承した印（三種の神器）の一つで、またこの流派の聖典の役割を果たした文献『清水動閑註解石州流三百箇條』（三巻）、及びこれと関連が深く一体化している『動閑茶湯書』（全

▼古文書（こもんじょ）

史料となる昔の文書、記録

▼巻頭の言（かんとうのげん）

書物や巻物などの初めの巻頁

|        |           |           |             |
|--------|-----------|-----------|-------------|
| 仙台藩茶道鑑 | 1 清水道閑    | 1 2 動閑    | 1 3 道竿      |
|        | 4 道簡      | 1 5 道斎    | 1 6 道君      |
|        | 7 道幹      | 1 8 道鑑    | 1 仙台藩茶道鑑・宗家 |
| 9 落合道鑑 | 1 10 大泉道鑑 | 1 11 大泉道鑑 |             |



十一世道鑑の宗家代理 大泉道紀（教授）の手前

十八冊）の解読研究をライフワークに定めた。

この目的を達成するための、茶湯に関する古文書、さらに収集した膨大な資料の解読研究等に八年以上の長い年月を費やすことになった。『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』という本にまとめ、丸善出版センターから自費出版することによりやく漕ぎ付け、仙台藩の茶道の真髄と歴史の詳細を初めて明らかにすることに成功した。

瑞鳳殿で政宗公の法要、ほうよう けんぢやしき献茶式

十世道鑑の著書の出版に関しては、河北新報（昭和五十五年十月）や全国主要新聞でも紹介されるなど、名著と評された。また、本の「巻頭の言」には、当時の島野武仙台市長から、そして出版記念会には仙台市長はじめ関係者の出席のもと盛大に開催された。

▼瑞鳳殿（ずいほうでん）

仙台市青葉区霊屋下にある仙台藩祖伊達政宗の霊廟。広瀬川と蛇行部を挟んで、仙台城の本丸跡と向かい合う経ヶ峯に位置する。元々あった建物は一九四五年（昭和二〇）七月一〇日の仙台空襲で焼失したが、一九七九年（同五四）にコンクリート造りの現代工法で復元された。



伊達政宗公の法要で献茶式を行った  
十世道鑑（昭和五七年・於瑞鳳殿）

この日は、十世道鑑の長年にわたる努力が報われた「人生最良の日」であったに違いない。また、仙台市・仙台市健康都市連絡協議会から表彰も受けた。瑞鳳殿で行われた伊達政宗公の法要では、伊達家十八代当主伊達泰宗様（やすむね）からも出席の上、献茶式（けんちやしき）（写真上）が執（と）り行われた。

十世道鑑は、石州流清水派の優美な手前が、貴重な伊達文化遺産であると確信するに至った。そこで、口伝の作法を後世に正しく伝えるため、それをおおよそ十五年かけ、原稿に書き溜め、平成十四年に『仙台藩茶道石州流教本』として自費出版。同年『仙台藩茶道石州流教本特殊手前編』を、三番目には『仙台藩茶道石州流教本補遺』、さらに同二十二年、『仙台藩茶道石州流教本特殊手前編（二）』を出版して、宗家の責任を果たしつつ、そのわずか一週間後に百一歳で天寿を全うした。

石州流清水派の「中興の祖」として、茶道史にその名が深く刻まれよう。

## 【謝 辞】

本書の一部の転載をご許可賜りました古田義弘先生に  
厚くお礼申し上げます。

## 【参考文献】（五十音順）

『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』

十世大泉淑子（道鑑） 丸善出版サービスセンター

昭和五十五年

『清水動閑註解石州流三百箇條』二世清水動閑

十一世大泉道鑑蔵

『仙台領に生きる郷土の偉人傳Ⅰ』古田義弘 本の森

令和二年

『仙台領に生きる郷土の偉人傳Ⅱ』古田義弘 本の森

令和三年

『仙台領に生きる郷土の偉人傳Ⅲ』古田義弘 本の森

令和四年

『茶の湯文化学』（三十三号）『動閑茶湯書』の解説と校注

（その一）『露地之書』十世大泉道鑑 十一世大泉道鑑

令和二年

『茶の湯文化学』（三十七号）『動閑茶湯書』（その二）『茅

葺數寄屋寸法』十世大泉道鑑 十一世大泉道鑑

令和四年

『動閑茶湯書』二世清水動閑 十一世大泉道鑑蔵

## 【付記】

本書の問い合わせ先（発行所）

〒九八四-〇〇五一

仙台市若林区新寺一丁目五-二六-三〇五

本の森 電話とファックス 〇二二-二九三一-三〇三



おこなづめ  
大棗「六十二万石」

この銘は、伊達家十八代当主伊達泰宗様から十世道鑑が賜わったものである。伊達家と当流宗家の太い絆の象徴である。